

委員会から

第3回社会貢献事例発表会の開催報告

Contribution to Society Case Study Presentation Report

社会貢献委員会

1 社会貢献事例発表会開催の概要

3月1日 第3回社会貢献事例発表会が開かれた。今回は昨年に引き続き、一昨年3月の東日本大震災の復興に向けた日本技術士会会員の取り組みを発表し、本会としての活動の課題を考え議論する目的で実施した。

全国で事例発表会に参加いただくためWeb会議システムを利用し東北、中部、近畿、中国の各地域本部がリアルタイム中継を実施した。発表会場に47名、Web会議に約30名が参加した。

当日は内村会長のご挨拶で始まり、東日本大震災への本会会員としての3つの社会貢献事例発表を行った。さらに発表者に加え田村裕美氏をパネリストとし、社会貢献委員会・川畑委員長のコーディネートのもとでパネルディスカッションを実施した。Web会議を利用し全国からも積極的な発言をいただくことができた。

この発表会には、大学技術士連絡協議会の他、ソニー技術士会、日本無線技術士会にも協賛を頂いた。



写真1 報告会参加者

2 事例発表概要

発表1

「岩手三陸の”なりわい再生”に協力して」

ー技術士、

日本技術士会の協力活動のあり方を問う！ー

林 謙三 経営工学部門

(株)テクナレッジ・ジャパン 代表取締役



写真2 林謙三氏の事例発表

経営工学部会有志で策定中であった「経営工学ビジョン2050」を、東日本大震災の復興に実践すべく経営部会有志10名で「岩手三陸協力WG」を立ち上げた。「暮らしの再建」「なりわいの再生」「安全の確保」を実現するため、岩手大学の復興活動等を支援した内容を発表した。

この活動を通して、個々の技術士の自発的な活動だけでは被災地域の要望に対し応えるには限界があると指摘し、“技術士の集団から、組織の日本技術士会”に変身するための提言が行われた。社会への更なる貢献、技術士に働き甲斐の提供、活動のための財源、技術士の地位向上の正のスパイラルの実現が重要であると指摘した。

一方会場との質疑の中で、個人ではなく日本技術士会としてどこまでできるか、継続的な活動資金の確保はどうするかなど、民業との棲み分け等の課題も明確になった。

発表 2

「原子力・放射線部門の技術士として、震災後の福島で何ができたか」

高橋一智 原子力・放射線部門

高エネルギー加速器研究機構 放射線科学センター



写真 3 高橋一智氏の事例発表

福島県出身者であり、放射線に関わる技術士として、何ができたのか、そして何ができなかったのかを発表した。職場自体が被災しガソリン不足等で動けない、放射能について発信しようにも、正確な情報はなく、伝手も無かった。こんな中でまず自分の得意な放射線の測定から始めた。高速道路移動中に各地の放射線量を測定し、農産物、土壌の測定を繰り返すうちに全体像が見えてくると同時に、数百名が参加する土壌測定プロジェクト活動に参加するようになってきた。

自分で計測したことでデータに対する自信ができた。被災地一般の人との接点が大切であるが、小さな接点を見逃さずに飛び込むことで大きな貢献活動につながった体験を語った。

発表 3

「東日本大震災 水産加工技術支援報告」

阿部万寿雄 水産部門 ABE 技術士事務所



写真 4 阿部万寿雄氏の事例発表

被災後一ヶ月ほど過ぎてから関係会社や、漁業組合から、水産加工場・組合の施設等が壊滅的な被害を受け支援を求める連絡を受け、現地で行った支援活動を発表した。水産関係の緊急復旧施設である水産物冷却用の製氷施設の技術情報を提供することから始まった。

福島県出身者であり、放射線に関わる技術士として、何ができたのか、そして何ができなかったのかを発表した。

職場自体が被災しガソリン不足等で動けない、放射能について発信しようにも、正確な情報はなく、伝手も無かった。こんな中でまず自分の得意な放射線の測定から始めた。高速道路移動中に各地の放射線量を測定し、農産物、土壌の測定を繰り返すうちに全体像が見えてくると同時に、数百名が参加する土壌測定プロジェクト活動に参加するようになってきた。

被災後一ヶ月ほど過ぎてから関係会社や、漁業組合から、水産加工場・組合の施設等が壊滅的な被害を受け支援を求める連絡を受け、現地で行った支援活動を発表した。水産関係の緊急復旧施設である水産物冷却用の製氷施設の技術情報を提供することから始まった。

大船渡は地方事務所の権限が強く、市長の行動力等により復旧が早く進んだが、一方震災で失った市場・販路の復旧は困難な状況が続いている等、実際に支援活動を行う中で見えてきた地域差、地域ごとの課題を生々しく報告された。

これからは、工場の継続的發展に向け新製品開発、品質管理要員等の支援が今後求められると指摘した。

パネルディスカッション

「東日本大震災への技術士の社会貢献」

パネルディスカッションでは、継続的に社会貢献を実施するために何が必要かについて、資金確保、貢献活動の体制について活発な議論がなされた。

活動の裏付けとなる資金を集め運用する仕組みが必要であり、日本財団等からのファンドを受け入れる、あるいは会員からの寄付の活用等具体的方法にパネリストだけでなく会場からも提案がなされた。

また実際の活動は、複数技術分野の組み合わせが必要であり、枠を超えた活動につなげることが重要である。このため日頃からの人的ネットワークの有用性、Facebook 等の IT の活用が話題になった。



写真 5 パネルディスカッション

3 全体を通して

技術士による社会貢献活動が 2 年近く経過し、構造的な課題が明らかになり、これらについての突っ込んだ議論ができたと思う。社会貢献委員会として受け止め次の活動に活かしていきたい。